要旨

本研究は、現行の高校中国語教育のめやすを深く分析した上で、日本人高校生に対する中国語教育方法と方略を研究した。以下研究対象、研究目的、論文構成、成果と結論、不足及び今後の展望の五つの部分に分けて紹介する。

１、研究対象

本研究は日本人高校生に対する中国語教育方法と方略を研究対象にした。本研究では、現行の高校中国語教育のめやす(『外国語学習のめやす 2012』中国語部分)を深く分析し、それの高校段階においての具体的な実施状況及び筆者の実際教育経験と結合することによって、日本における高校教育現況に適用する場面教育法の方略及び具体的な実施アドバイスを提示した。

『外国語学習めやす 2012』(以下「めやす 2012」という)は日本文部科学省の学習指針づくりの委嘱事業の成果として、「公益財団法人国際文化フォーラム」により 2012 年に提示された。これは高校から始まる中国語学習を指導する全面的なめやすである。「めやす 2012」は 15 の話題分野にそれぞれ 4 つの言語運用能力レベルを設け、詳細かつ全面的に中国語のコミュニケーション内容を示した。日本の中国語教育を研究するには、「めやす 2012」の統領性を軽視してはいけない。このめやすを十分理解しておかないと、日本の高校における中国語教育方法と方略に関する研究は困難になる。

しかし、このめやすも各学校の特別性を考慮した上で実施されなければならない。本研究では、中国語を設置した各学校の授業時間、単位及び学生自身などの具体的な状況を深く分析し、より実施しやすくて適切な場面教育法を提示した。これは日本の高校における中国語教育方法と方略に対する有意義且つ即応的なまとめ、再編と新たな探索でもある。

２、研究目的

「めやす 2012」は全面的かつ段階的であるが、具体的に教育を実施する際、「めやす 2012」から高校レベルに適切な内容を選び、そして文法の一貫性のある授業を行うのは非常に難しいことである。

それゆえに、本研究は、めやすの「話題感」と「段階感」を維持し、できるだけ全面性も確保する上で、日本の高校の中国語教育現状に合わせて具体的に実施しやすく、語彙と文法の一貫性があり、順次的に深めていく教育方法と方略を提示することを目的とした。

３、論文構成

本論は５章から構成される。序章、第１章「場面教育法及びその実施可能性」、第２章「外国語学習めやすの評議」、第３章「場面教育法の五つの場面」、第４章「まとめ」。

序章は研究背景、先行研究、研究対象、目的及び研究方法の方面から系統的な考察と検討をし、日本の高校の中国語教育現状を十分調べた上で、本研究の着眼点と解決すべき問題を示した。

第 1 章、現況において場面教育法の実施可能性を述べた。場面教育法と他の伝統的な教育法の相違を検討し、日本の高校における中国語教育の適切性を明確にした。そして、発音、語彙、文法及び表現の四つの方面から場面教育法の実施構想を提示した。

第 2 章は話題別に(「めやす 2012」の 15 話題)、指標、表現例、文化現象の三つの方面

から「めやす 2012」を総合的に評議した。それぞれ優れた所と考え直すべき所を示した。これらの考察は直接に第 3 章の五つの場面の設定に根拠と考証を提供した。

第 3 章は本論の核心――五つの場面の設定、性質的な定位及び各場面の具体的な内容を述べた。前章のめやすの評議に基づき、高校レベルの内容を選出し、五つの場面を設定した。各場面それぞれに語彙項目、文法項目及び子場面を台にした演習実例を示した。各場面「文法構造、文型（場１場２場３）――機能項目、慣用表現（場４）――特殊文型（場５）」の性質的に偏重する点は学生の認識法則によって、簡単な内容から複雑な内容へ深めさせる。また、第 3 場には前の二つの場面の内容を復習する項目を加え、既存の知識を繰り返し、思い出させることにより、勉強した内容をしっかり消化して活用してもらうことを目指した。

第 4 章は本論の長所、短所及び今後の研究方向と発展についてまとめた。本論はカバー範囲、実施可能性と実践検証の面で追及を耐えられる。これは本論の長所と言える。しかし、言語資料の内容、理論分析及び重複する面で、まだまだ修繕すべき所がある。最後に、内容の規範、場面の開拓及び大学における中国語教育との繋がりの三つの面で、今後の発展を示した。

４、成果と結論

上述の研究を通じて本論は以下のような成果を得た。

（１）『外国語学習めやす 2012』を深く研究した上で、その内容を検証し、各部分の不足を指摘した。具体的に、

A、全面性を追求すると、話題が膨大となり、限られた授業時間内にめやすを完成させることが困難であること。

B、各話題における語彙・文法項目の関連性が不十分であること。

C、各レベルの到達目標が設定されているが、具体的な実施方法が明確でないこと。

（２）日本の高校における中国語教育の現状に適応する場面教育法の整体的な構想を提示した。

（３）場面教育法の五つの場面を提示し、各場面の教育目標、授業重点を日本語と比較し、設定した。

（４）各場面の教育目標、授業重点を実施するため、高校レベルに適する詳細内容について、語彙、文法、文化項目を具体的な表現例で構成した。

初歩的な結論として、高校の中国語教育は大学の外国語教育及び第二言語教育としての中国語教育の基礎であり、現代言語学理論に基づいて科学的な教育方針・方策・内容を策定しなければならないと提示した。

５、不足と今後の展望

言うまでもなく、本研究は上に述べた内容のような不足点以外に、多くの修繕すべき所があるはずである。これらは今後の研究動力になり、今までの研究成果を活用しながら、実践の中で検証を受け、実践の中で進化していく。